

ご挨拶

首都圏段戸会会長

永田 宏

(高11回)

平成24年9月
第30号

発行責任者
首都圏段戸会
会長
永田 宏
編集発行人
広報担当
磯尾 進



東日本大震災から1年半、被災地の復興は多くの問題を抱えながらも、ようやく緒に就き始めた処です。国外ではギリシャの財政破綻に端を発した歐州危機は、イタリー、スペインをも巻き込み、世界経済の危機にも発展するリスクをも孕んで来ています。中東各地で引続く紛争、中国の東シナ海海域進出をめぐる日本、アジア各国とのトラブル、二十一世紀の最初の十年は、これを迎えた時我々が予想していた米国のリーダーシップの下での世界の政治経済的安定とは異なった混乱の時期を迎えてしまった様です。こんな時だからこそ日本は、二十一世紀に在るべき国の人材を描き、国内の政治的小事にとらわれず、アセアンの発展をリードして行く大局的思考とその実施に向けて努力すべきだと思いますが、皆様は如何お考えでしょうか。

「社会あつての個人」という観点に立てば、個人の主張がやもすれば過度に助長され過ぎてきた社会風潮は、組織、

下さる。

社会延いては世界の不安定化に繋がつて行く事は自明です。これから時代の新しい社会の発展に向かっては、個人のみならず国に対しても「忘己利他」の精神による社会、世界の安定を深く求めて行く事が必要とも思えます。

そんな種々の不安定の中でも、我が母

校岡崎高校の安定感は、誠に頼もしい限

りですが、大学入試に於いては、多少の

異変も感じられます。総勢七十名余にも

拡大した首都圏段戸会の世話人会が、一

年を費やして準備を進めています本年の

総会・懇親会は、記念すべき第四十回を

迎えます。学校を代表して来られる先生、

同窓会長、恩師の先生方から、母校の過

去、今日、未来についてお話を伺えるの

は、大変な楽しみであります。同期生、

後輩そして先輩達との再会や新しい出会いの場を提供出来るのが同窓会です。今

年第四十回という節目の総会・懇親会にお誘い合わせの上、皆様是非共ご参加

平成24年度世話人

- (高2回) 服部 登
- (高3回) 丹羽 鼎 会計監査
- (高6回) 有馬 弘政
- (高7回) 是津 定利
- (高8回) 杉浦 嘉久
- 田中厚生 広報担当
- (高9回) 岡田 敏夫
- (高10回) 山本 真司
- (高11回) 水田 宏 会長
- 中根淳
- (高12回) 鶴田文男
- 成瀬徹
- (高13回) 中 浩之
- (高14回) 磯尾 進 広報担当
- 水谷鏡子 副会長
- (高15回) 神谷国広
- 満江信之

- (高16回) 野村 親信 副会長
- (高17回) 伊与田正彦
- 佐伯寛子
- 山田博子
- (高18回) 音部昌宏
- 山内 恵 広報担当
- (高19回) 都築正行 会計
- 福山 透 情報担当
- 村木央明 事務局長
- (高20回) 天野隆太郎 副事務局長
- 企画担当
- 辻村貴典 副事務局長
- (高21回) 小栗恵子
- 山田俊文 情報担当
- (高22回) 上田洋子 書記
- 中村賢治
- (高23回) 野々山 浩 会計
- (高25回) 戸田譲三 会計監査
- (高26回) 織田利彦 副事務局長
- 企画担当
- 山口知子 情報担当

- (高27回) 長田光雄
- (高30回) 米津智徳
- (高31回) 高原正之
- (高33回) 阿部由美子 会員担当
- (高34回) 板谷敏正 企画担当
- 井上由美子 企画担当
- (高35回) 岡田敦嗣
- 菅伸介 会員担当
- (高38回) 中西和幸
- (高40回) 大田 武
- (高41回) 平山健二
- (高42回) 長野麻子 広報担当
- (高43回) 八田益之 会員担当
- (高44回) 松尾直樹 情報担当
- (高45回) 筒井貴之 情報担当
- 西浦瑞恵 情報担当
- (高46回) 大川 博
- 小椋俊博
- (高47回) 杉本いづみ

- (高48回) 藤井晋也
- (高49回) 青島信吾
- (高50回) 鳥居福代 情報担当
- (高52回) 今泉貴雅
- 近藤佳子
- (高53回) 小野靖王
- (高57回) 加納実久
- (高58回) 石川航己
- 鈴木菜穂子
- (高59回) 竹内愛実
- 塚本有香
- 内藤茂弥
- (高60回) 篠原国智
- 杉浦綾香 書記
- 吉村圭吾
- (高61回) 新見由佳
- (高62回) 大山なつみ

“段戸団碁会”

- (代表: 藤田訓弘 高13回) kfujita@muc.biglobe.ne.jp
- “段戸華教室”
- (代表: 西浦瑞恵 高45回) usagi-m@msg.biglobe.ne.jp
- “段戸音楽会”
- (代表: 山田博子 高17回) marcialegow2w-danon3@memoad.jp

“段戸句会”

- (代表: 小森 葍子 高13回) shigeko_komori@ybb.ne.jp
- “段戸「山の会”
- (代表: 板谷敏正 高34回) itaya@propertydbk.com
- “段戸ゴルフ会”
- (代表: 木村富司雄 高10回) BYR10566@nifty.ne.jp

「首都圏段戸会」は愛知県立岡崎高校の首都圏同窓会です。

公式ホームページ <http://homepage3.nifty.com/dandokai/>

首都圏段戸会

検索

同期の仲間 「やっと日目会」

高10回 山本 真司



三河地方の方言に“やっとかめ”という挨拶言葉がある。漢字で書くと八十日目、即ちかれこれ八十日ぶりの再会で久しぶりだね～という意味であるとか。岡高第10回卒の有志で作っている遊びの会にこの名前を付け、年に1度ずつのゴルフと軽い旅行を楽しんでいる。年に2度前後の再会であるので、まあ会うごとに“やっとかめ”ではある。

この会が生まれたオリジンは30年以上前に遡るという。学生時代にお世話になった八田重雄先生（故人）（英語、クラス担任、進学担当）が首都圏段戸会総会に出席され、10回生と2次会で談笑されたのがきっかけとなり、その後安藤（哲生）、安原、木村ら当時の段戸会世話人が中心となって時々会って談笑する会ができたという。この会は2002年になって“やっと日目会”という正式名称をつけた定常的な会に発展し、現在に至っている（現幹事は宇佐美）。この会は首都圏段戸会とは付かず離れずの絶妙な間合いで運営されており、気心の知れた仲間が気楽に集う場を全員で作り出していると言つて良いであろう。

この会の過去の履歴を見ると、旅行関係では京都が非常に多く、その他には鎌倉、松本、横浜、伊豆、日光、東京などとなっている。またゴルフ関係では大熱海でプレイすることが多く、その他には富士ゴルフ、仙石、トラディション、蓼科などとなっている。今年はスカイツリーの話題が騒がしい

ので、これを少し離れた所から静かに遠望しようと東京湾クルーズが企画された。15人程が集まり、バイキング形式の昼食と談笑を楽しみながらの東京湾1周クルーズであった（写真1）。また秋には富士山麓でゴルフが予定されている。

ところで我々の高校時代は、戦後の混乱期がようやく納まってきたもののまだカラーテレビは無く初のトランジスタラジオが発売された程度の貧しい時代であった。しかし気持ちは天真爛漫というか、勉強もさることながら結構遊びに熱中したおおらかな時代であったように思う。そうした時代の思い出として、やっとかめ会でしばしば話題になるのは高校2年時にクラスを越えて取り組んだ仮装行列がある（写真2）。当時は男子組、女子組などと男女が別々に分かれているクラスが多く男女学生間の会話は乏しい時代であったが、クラスの枠組みを超えて仮装行列の準備に男女一致協力して携わったことが、懐かしい思い出の一こまとして記憶に残っている。

ただしこの仮装行列には問題があった。計画が事前に中止させられることを恐れて学校当局へは内密に事を進め、おまけに仮装用の白衣として教室のカーテンを大量に無断借用してしまった。この事件はその後職員室で大問題となったらしく、事態収拾のために八田先生が必死の努力をされたという。そのお陰であろう、八十日を超える頃には事態は沈静化し、学生へのおとがめも一切無いままでたく普段どおりの学園生活に戻る事が出来た。



段戸サークル

段戸華教室の新しい試み



段戸華教室は、2004年に始まり、水谷鏡子さん（高14回）のご指導のもと、8年も教室が続いています。年に3回ほどのレッスンは、この春で23回目を迎えました。春の花のアレンジメントや花束、クリスマスのリースなど、季節感あふれる花々に触れさせていただいています。夏場は生のお花が持たないということで、ここ数年は、アーティフィシャルフラワーという造花でのレッスンも行っています。仕事や家事から少し離れて、気持ちをリセットする時間として、また、同窓生との懐かしい故郷の話をする場として、華教室はとても貴重な集まりとなっています。そして、この春から、水谷さんにご出張していただき、華教室メンバーが住む地域の子どもたちに「親子華教室」を開いていただくという、新しい試みが始まりました。花をいけることを通して、子どもたちに挨拶や道具の取り扱いなどの躾も教えつつ、自然の造形のすばらしさを伝えていきたいと思っています。段戸会から広がって、さまざまなつながりができつつあります。職種や年代の違う人とも、「花が好きな同窓生」という共通項で、出会い、話し合い、コラボレーションしあっています。毎回、集中して花と向き合い、作品が完成した後は、お茶をいただきながら、楽しいおしゃべりタイムを満喫しています。初心者の方も大歓迎です。ぜひ一度、レッスンにおいてください。お待ちしています。

西浦瑞恵（高45回）

特 集

人生お楽しみ中！

旅行・パソコン・図書館・ウォーキング・料理教室・そして飲み会 高8回 近藤 忠男

ちょうど後期高齢者世代に足を踏み入れたところである。長いようで短かった過去を顧みると、どうやら私の老後は第三キャリアあたりから始まっているらしい。第三キャリアを迎えるポストが余裕あるものになるにつれ、それまでの三十余年間をいかに自分本位に過ごしてきたかが悔やまれた。雑事をすべて妻に任せっきりにしていたことに、ようやく気が付いたのである。

子供達はすでに社会人、私達の手からは離れた。原則として毎月一度、小旅行に出かけることにした。家事一切から解放されるので妻に異論のあろうはずがない。バスツアーを主にしながら、国内各地の温泉を巡る。ハワイ、香港、シンガポール、桂林、ロマンチック街道にまで足を伸ばした。

パソコンを買って、子供達とのメールを開始し、ついでに自己史を書いた。第一キャリア時代、社内誌に書き連ねた雑文も一冊にまとめた。一応、人生の中間決算というつもりでもあった。

それまで読む本は新刊を購入するものと決めていたが、思い立って近くの区立図書館に通うこととした。多くの同年輩が、図書館を自宅の書斎のように利用していることを知った。第四キャリアの非常勤監査役時代にウォーキングを始めた。

さいわい住まいが多摩川沿いにあるので歩くコースの選択は自在である。昼間や夕方も試してみたが、ウォーキングはやはり早朝に限る。約45～60分、帰ってからのシャワーが至福である。午前6時までに食事も終え、娘の来訪を待つ。娘は親孝行と称して、出勤前に20分ほど立ち寄ることを日課にしている。



ウォーキングと相前後して、月一回のシニア料理教室にも通うことにした。先生はもちろん女性、生徒は男性中高年ばかり。料理そのものもさることながら、閉講後の四方山話と一杯が無類に楽しい。しかし家で料理はしない。厨房は妻の聖域である。

現役時代の仲間との定例飲み会が月二回、それに料理教室などが加わるので、月4～6回は飲みに出かける。老後の充実は、語るべき多くの友達を持つことによってはじめて叶えられる。家では全く飲まない。

尺八との出会い、人との出会い、今

高17回 伊藤 裕

音楽環境には比較的恵まれた方で子供のころから好きだった。大学では音楽鑑賞のサークルにも入った。所謂クラシックが中心ではあったが、色々な年代・ジャンルの曲を持ち寄って聴いた。現代音楽、モダンジャズ、民族音楽など様々である。多感な年代で他人の影響を受けやすく、オペラやバレエ音楽に惹かれ、當時珍しかったベルリンドイツオペラの引越公演や、大阪万博記念のバイロイトのキャストによる公演に、金も無いのに出かけたりもした。

ステレオが普及し始めた頃であったが、狭い下宿で聴くのはSonyラジオからのFM放送、勿論モノラルである。クラシックが多かったが、今でも記憶に残る番組は、東京芸大の小泉文夫先生が自ら音源を集めた「世界の民族音楽」と、洋楽系の作曲家が日本音階や和楽器を用いた「現代邦楽」である。これらに接するうち、西洋の一時期の限られた音楽のみに固執する事に疑問が湧いてきた。丁度その頃卒研で配属された研究室に尺八を嗜む方がいた。大学院進学後、新聞社運営の文化センターに、都山流（とざんりゅう）尺八講座があることを知り入門した。二年間の手ほどきで「初伝」を頂いて、北関東の電機メーカーに就職した。

周りから揶揄されても習いたての吹きたい一心で、寮でもまた現場実習中の昼休みにも事務所の片隅で吹いた。なんと偶然、その現場事務所に都山流の師匠が居たのである。すぐに会社の同好会へ、年齢が倍半分以上違う仲間ができ、そこで酒の飲み方を筆頭に、様々な生活の知恵を授かった。

家庭を持ち子もでき、仕事の量と責任の重圧が掛るのに、時間は要しなかった。二十代後半から五十年後半まで仕事に追われ、半年ほど尺八に触れもせず、気が付けば尺八がカビ

だらけ。しかし不思議とヤメルと言うことはなかった。五年十年の単位で見ると人生波あり、40歳を前にして2年間出向の身となった。出向機関にも高名な師匠が居て、その指導の下准師範試験を受け合格した。

その後師範受験に臨んで縁あってプロの演奏家の指導を受ける事になり、師匠主催年に一度の演奏会に出演する様になった。この会はプロの絃方（箏、三絃）に助演をお願いし、尺八は一人吹が基本、初めての舞台での緊張感、演奏が終り拍手の中での解放感は今でも覚えている。そして自分が感動しているのである。その時気が付いた「プロは聴衆を魅了する。アマチュアは金（出演料）を払って自らが感動する。」と。もう十数年になるが、これがやめられなく続いている。

長く続けられるのは、職域地域の同志や兄弟弟子との交友と家族の支えのおかげである。首都圏段戸会にも幹事さんからのお誘いで出演し、音楽の会にも入会した。しかし仕事が主の間は足を運ぶのが難しい。鳥山順丘氏手記（会報28号、高58回）で「居る居る詐欺」と指摘された張本人である。仕事と趣味の主従を切替える時期かと感じている。



年に一度のプロの絃方の先生との演奏会、緊張の一時

特 集

なぜこの仕事を？ — 起業の巻

大手企業の社内ベンチャー制度を活用しIT起業家に 高34回 板谷 敏正

皆さんはクラウドコンピューティングという言葉をご存じでしょうか。インターネット上でソフトウェアやデータベースを自在に扱うサービスのことで、グーグルやアマゾンあるいはフェイスブックなどがこれに該当します。個人ではすでに多くの皆さんがこれらのサービスを利用していると思いますが、企業においてもこのクラウドサービスが活躍しています。実は小生が起業したITベンチャーは、企業や自治体の不動産管理業務を支援するクラウドサービスを提供しています。国土交通省、自治体、金融機関、不動産会社、大手製造業、不動産ファンドなど全国で約800社が利用し、利用不動産の総数は14万棟に達しています。不動産業界では当社のサービスがデファクトスタンダードに成長しつつあります。また、もう一点ユニークなのは当社の創業時に清水建設という建設会社の社内ベンチャー制度を利用している点です。この制度は、若手社員が新しいビジネスモデルを考案し、役員会の審査を合格すれば自身が社長となって会社を起業できるという仕組みです。小生もこの制度に則り創業しました。創業した当時は37歳。日本の不動産業界に最新のITサービスを駆使して革命を起こそう！と意気込んで創業しましたが、当初はクラウドサービスの認知度も低く、事業を軌道に乗せるのには大変苦労しました。幸いにも当社メンバーが一丸となって開発したクラウドサービスの評判も徐々に向上し、創業3年目くらいから大手企業を中心に戸建て企業が大幅に拡大しました。おかげさまで現在も

堅調に成長しています。2009年には我が国でもっともすぐれた経営戦略を実践する企業として、経営戦略論の世界的な権威であるハーバード大学マイケルポーター教授と



ポーター賞授賞式にて、ハーバード大学マイケルポーター教授と

バード大学のマイケルポーター教授の名を冠した“ポーター賞”を受賞しています。同時受賞はユニクロの柳井社長でした（写真参照）。企業向けのBtoBのビジネスなのであまり皆さんが目にすることはないかもしれません、多くの企業の不動産管理の効率化や資産価値向上に貢献できるように今後も頑張っていきたいと考えています。

経歴：早稲田大学大学院理工学研究科卒、博士（工学）。1989年清水建設株式会社入社、2000年同社社内ベンチャー制度を活用しプロバイデータバンク株式会社設立、代表取締役就任（現在に至る）。2009年一橋大学よりポーター賞受賞。2010年より芝浦工業大学客員教授、早稲田大学招聘研究員を兼任。

環境に与えられるのではなく、環境を創り出したい 高44回 松尾 直樹



学生時代から創業に参加する事になったそもそものきっかけは、尊敬する先輩の死でした。先輩は建築界に夢を持ち、世界の建築を観るために、最古のエジプト・本場のヨーロッパへの旅行中にエジプトで風土病をもらって亡くなってしまいました。私は訃報を聞いた時に、現実感が無く、世界が遠のく感じました。

それまでは、日常の中に死は隣にあるという事を全く意識していませんでした。

先輩は、気さくな人柄で学外に友人の多い人でした。近くのコミュニティ（大学内や岡崎市営学生寮の友人達）ばかりで遊んでいた私にとって、いつも新鮮でためになる話をしてくれていました。

「街角ミュージシャンの友達に言われたんだけど、『お前ら東大生ってなんで挑戦しないの？俺らは音楽が成功しなければ、ただの失敗者。でもお前らは最後に東大が残って安定企業に勤められるんだろ？だったら、いくらでも挑戦できるじゃん』俺もそうだなと思って反省したよ」と福島弁独特のイントネーションで麻雀の最中に語っていた言葉が思い出されます。

先輩の言葉と死が隣にある現実。今死んで自分は満足なのか？悔いはないのか？と問い合わせたのが大きなきっかけでした。

それから、父親との対話や所属していたヨットサークルの代

表との本音トークを通して、自分が今いる環境（円満な家庭・居心地の良いサークル）は勝手に出来ているわけではなく、それを守ろうと努力する意思と行動をした人によって成立している事に気づきました。

環境を与えられ、それを享受して生きるのではなく、環境を創り出す事に挑戦したい！というのが私の根っこにある動機です。それ以外にも、エクセルですぐに計算出来る生涯賃金が嫌だったのでありますし、一回きりの人生なのでユニークな人生を全うしたいといった理由もありました。

恐怖は当然ありましたが、成功も失敗も自分の実力、フェアなので仕方が無いと覚悟しました。三河武士ではないですが、倒れるなら前を向いて倒れようと思いました。

弊社は、「ビジネスを生み出す工場となる会社」を目指し、コールセンターやITのアウトソーシングを主軸としながら、新規事業を4つ（コンパートナシヨコラティエ・ハリウッドニュース・プライダルウインド・焼肉ざぶとん）を開拓しています。

日本国内10年間で創業による創出雇用数は2100万人。次々と創業してスピンアウトさせるモデルを体現する事には、社会的な意義を感じています。グローバルで競争している現代、この先どうなるか分かりませんが、今後も三河武士の気質は忘れずに前を向いて生きたいです。

経歴：東京大学法学部在学中に医学部の友人と株式会社ネットワークインフォメーションセンターを創業。現取締役経営企画部長兼人事部長。株式会社焼肉ざぶとん代表取締役。株式会社ZEエナジー取締役（社外役員）

日本にイノベーションの風土を 高46回 小山 龍介



新規事業の立ち上げや新商品開発のコンサルティングを行なう一方で、自社でも新しい事業の立ち上げを進めています。大手では、コクヨさんと文具を開発したり、サッポロビールさんとワイン開発をしたりといった活動をしています。

もともと、ものをつくるということが好きで、小学校の頃はMSXという家庭向けのコンピュータでゲームをプログラミングして友人に販売したり、高校では生徒会活動の一環として、会報を毎日発行したりといったことに熱中しました。

大学時代には、映画サークルに入り、学業そっちのけで映画を撮り続けていました。

転機が訪れたのは、社会人になってからです。映像をなりわいにしたいという思いから広告代理店に就職するのですが、希望したクリエイティブ職ではなく、営業職に配属されます。ちょうどインターネットが普及し始めるタイミングで、ネットベンチャーを相手にしている中で、事業立ち上げに興味を持ちました。

それにはビジネス全般を知らなければならぬと考え、MBA留学を決意します。米国アリゾナにあるサンダーバード国際経営大学院に入学、在学中はシリコンバレーでインターンをしたり、会社を立ち上げインディアンジュエリーの

輸出入や、翻訳事業を立ち上げたりしました。

卒業後は、一年ほど日本企業の海外進出支援をサポートするためにニューヨークで働き、その後は日本を拠点に活動をしています。

2006年には、書籍を出す機会に恵まれて、『IDEA HACKS!』という本を出版します。これが好評で、以降10冊ほどシリーズ展開しています。シリコンバレーなどで見た仕事の新しいやり方を提案したもので、日本のワーキングスタイルを創造的なものに変えていきたいという思いで書き続けています。

今年に入り、翻訳を手がけた『ビジネスモデル・ジェネレーション』が好評で、本業の新規事業立ち上げに連動する執筆内容に踏み込み始めました。プロダクト・イノベーションでは優れていた日本が、その先のビジネスモデル・イノベーションにも、その能力を發揮できるよう尽力していくと考えています。

最近は、インプロビゼーション（即興劇）や能の稽古を始めました。身体性と日本古来の方法を組み合わせたクリエイティブメソッドを追求しています。日本が、改めて評価される時代が来る信じて、世界規模で活動していきたいと思っています。

経歴：株式会社ブルームコンセプト代表取締役。京都大学文学部哲学科美学美術史専攻。東急エージェンシー、MBA留学を経て独立。松竹株式会社では、歌舞伎関連の新規事業を立ち上げる。2010年より現職。

TOPIC ● トピック

縁をつむいで伝えるボランティア

東北の復興とそこで暮らしありのままに届けるべく、ご縁あつた方のインタビューの掲載等をするウェブサイト「みちのく仕事」。昨年6月よりそこでボランティアライターをしております。

2011年3月11日。就職活動のため愛知県の実家にいたところ、「眩暈？」と感じたのが私の東日本大震災でした。テレビを見て大変なことが起きたなという想いはあったものの、「被災地に行かなくては！」とすぐにはならず、震災から5日後には大学院の勉強の関係もありバングラデシュにいました。驚くことに、日本から遠く離れた国の山奥でもラジオ等を通じ津波の被害のことを人々は知っており「日本、津波大丈夫か？」と尋ねてくるのです。自分の国のこと伝えられない、心配してくれる人がいるのに何もできていないことへの焦りを感じつつ帰国しました。そんな頃、偶然見つけたボランティアプログラムに応募し、人生初の宮城県へ行ったのが4月11日。そこからは、被害の深刻さ、自分の無力さ、東京と被災地の温度差等々で、今迄に無い色々な感情に襲われていました。被災地に4~6月の間に通算3週間お邪魔をし、一段落した頃に出会ったのが「みちのく仕事」でした。

3月11日以降、出逢った人の数は数えきれず、本当に魅力的な方が多いのです。そして、その中にはなんと岡高の先輩、後輩との出逢いもありました。

時期によって必要とされる人、物は異なるように思います。ただ、時間が経つほど被災地外でメディアに取り上げられたり、人に思い起こされる頻度は減って行くかもしれません。それでも、現地の人の中から「忘れられるのが嫌だ」という声も耳にします。

誰かが発信することで、忘れない人がいたり、それまで機会がなかった人からも「私、こんな事できます」と手を挙げる人が現れるかもしれないなと思うのです。

来て欲しくはない次の震災ですが、他の地域にもいつ起こるか分からない。そんな中、第3の故郷にてご縁を紡ぎつつ、学ばせて頂きたいと思います。ぜひ、お時間のあるときに一度サイトをご覧ください。

高57回 加納 実久



現地でお世話になっている民宿のお母さんと



お世話になっている木の屋石巻水産の魚油タンク解体

第40回首都圏段戸会総会・懇親会のご案内

- 日 時 平成24年10月27日（土）13：30～17：00
- 場 所 アルカディア市ヶ谷（私学会館）（右地図参照）
千代田区九段北4-2-25 (TEL 03-3261-9921)
JR市ヶ谷駅から徒歩2分
地下鉄市ヶ谷駅（有楽町線、南北線、新宿線）
から徒歩2分



●講演会テーマ：「はやぶさ」の惑星間往復飛行と小惑星イトカワの微粒子

講 師：藤村彰夫氏（高18回） 宇宙航空研究開発機構（JAXA）名誉教授
総合研究大学院大学（総研大）名誉教授

2010年6月、多くの困難を乗り越えて小惑星探査機「はやぶさ」は帰還しました。これは、久し振りに日本の技術が世界に誇れる高い水準にあることを示した快挙であり、日本のみならず世界を感動の渦に巻き込んだことは、まだ皆さんの記憶に新しいかと思います。

しかし、このプロジェクトはここで終わったわけではありません。「はやぶさ」が小惑星イトカワから持ち帰った目には見えない微粒子を回収し、分析するところからが「核心」です。これは、人類にとって初めての経験であり、どこまで新たな発見ができるか大きな挑戦です。

JAXAで惑星物質試料受入設備のサンプルキュレーション・チームの責任者として重責を担われた藤村彰夫さんから、我々に夢と勇気を与えてくれたプロジェクトについて、お話を頂きます。

講師略歴：1977年 名古屋大学理学研究科博士課程修了
その後、中京大学講師、名城大学講師、名古屋大学助手を経て、
1988年 文部省宇宙科学研究所（現JAXA宇宙科学研究所）惑星研究系助手、助教授を経て、
1998年 JAXA惑星研究系教授
2011年 JAXA固体惑星科学研究系教授退任
JAXA月・惑星探査プログラムグループ研究開発室参与、総研大名誉教授
2012年 JAXAを退職し、JAXA名誉教授に就任（現在に至る）

この間、1996年から小惑星探査計画に参加。特に2005年からはキュレーション設備のチーフとして設備の仕様検討、開発、製作、試験、実運用を推進されてきました。

●会 費 男 性 7,000円 女 性 5,000円

但し、以下の会員については、特別割引があります。

古希を過ぎた会員（高12回以前）	4,000円
若手会員（高50回以降）	4,000円
学生会員（大学、大学院、専門学校等）	1,000円

●ご招待 古希年次（高13回）の方は、ご招待申し上げます。（会費無料）

●招聘恩師（予定）

金谷 鑑二（英語）	祖父江義信（数学）
岡田 保則（数学）	木村 好夫（社会）

運営協力金寄付のお願い

首都圏段戸会会长 永田 宏（高11回）

日頃から首都圏段戸会の運営にご協力を頂きまして、誠に有難うございます。

首都圏段戸会は、昭和47年（1972年）8月に第1回総会を学士会館で開いて以来、今年で40回目の節目の総会を迎えることとなりました。この間、当初は30~40名だった総会出席者も、昨年は240名近くにまで増え、出席者の幅も、中学第47回の大先輩から、岡崎高校を卒業したばかりの高62回までの幅広い年代の皆さんにご出席頂けるようになりました。

これも偏に会員の皆様のご支援の賜物と、重ねて御礼を申し上げます。

現在、首都圏段戸会では、長い歴史のある岡崎高校ならではの特色を活かし、首都圏において、「高校～大学～社会人を一貫してサポート」すべく、年間を通して各種イベント、勉強会、同好会、後輩への支援など様々な活動を進めています。

昨年夏は、震災の影響で中止した「オープンキャンパス」の活動（岡崎高校の現役学生を対象に、大学の見学、大学生活の紹介、その他学生の諸々の相談に乗るイベント）を今年は再開すべく、若手の会員が中心になって準備を進めています。また、幅広い年次の同好の会員が集まり「段戸サークル」と呼ぶ同好会も行っています。それも、体育会系のゴルフ、山登りから、文化系の音楽、フラワーアレンジメント、囲碁、俳句まで幅広い分野にまで広がっています。

また、首都圏段戸会の諸活動を皆さんにお伝えするために、「首都圏段戸会会報」（年2回発行）を編集し、会員の皆さんにお送りしています。H21年度からは会報をカラー化し、より生き生きとした表情をお伝えできるように致しました。

同様な趣旨で、会員の皆さんにタイムリーな情報を伝えるため「首都圏段戸会Home Page」（URL：<http://homepage3.nifty.com/dandokai/>）も開設し、鮮度の良い情報も提供できるようになりました。

総会の準備を始め、これまでご紹介してきました色々な活動を支えているのは、皆さんから頂いている「運営協力金（旧『運営基金』を改称）」と、各年次から集まった70名余の「世話人」の皆さんのボランティア活動であります。

首都圏段戸会は、企業・団体からの寄付などではなく、正に一人一人会員の皆さんのご支援・ご協力によって支えられ、人間的な手作りの感触を大切にしながら運営されている同窓会です。

お陰様で、H23年には、419名の会員の皆さんから、総額149万円近くの運営協力金のご寄付を頂きました。ご協力、誠に有難うございました。

首都圏段戸会の活動を、これからも益々充実したものとするため、これまで以上に幅広い会員の皆さんからの運営協力金のご寄付を募りたいと思います。ご協力の程宜しくお願ひいたします。

首都圏段戸会会計報告（平成23年度）

貸借対照表

平成23年12月31日現在		(単位：円)
科 目	金 額	
I 資産の部		
現 金	0	
通 常 資 金	1,415,507	
郵 便 振 替	4,800	
資 産 合 計		1,420,307
II 負債の部		
未 払 金		
負 債 合 計		0
III 正味財産の部		
正 味 財 産		1,420,307
負債及び正味財産合計		1,420,307

収支計算書

平成23年1月1日から平成23年12月31日まで		(単位：円)
科 目	金 額	
I 収入の部		
総会懇親会会費収入	1,088,000	
運営協力金	1,488,600	
受取利息	142	
当期収入合計		2,576,742
II 支出の部		
総会懇親会費用	1,388,100	
印刷費	949,314	
通信費	8,050	
世話人会費用	166,700	
雑費	91,700	
当期支出合計		2,603,864
当期収支差額		-27,122
前期繰越収支差額		1,447,429
次期繰越収支差額		1,420,307

監査報告書

首都圏段戸会の平成23年度（自平成23年1月1日至平成23年12月31日）の計算書類は、適正かつ正確であることを確認いたしました。

平成24年7月19日

会計監査 丹羽 鼎
会計監査 戸田 譲三

平成23年度運営協力金寄付者

(高3・併23回)

(高4・併24回)

(高5回)

(高6回)

(高7回)

(高8回)

(高9回)

(高10回)

(高11回)